

# せながむし

発行・古平町史編纂委員会  
編集・古平町史編纂室  
第十五号（毎月一日発行）  
平成二年十二月一日

## 『古平』の地名

近藤 芳二

明治二十四年の「北海道蝦夷語地名解」永田方正著、古平川筋の地名の中に、「ホロカフレーピライ」とある。意味は「却（逆）流の赤崖」と解しているが、その場所はどこの辺か、というところがどうしても分からなかった。ところが、数年前に出版された「武四郎蝦夷地紀行」の川筋取調図、「安政五年」の調査に、古平川最後の源流と思われる枝川が「ホロカフルピラ」という地名であることを発見した。また、明治二十九年の「浜町」五万分の一の地図で調べてみたが、その地名は地図にはのっていないかった。

永田氏は、この「ホロカフルピライ」を、この地のアイヌ語「フルピラ」と発音していたとしていた。そこで、「ホロカフレーピラ」は、「古平」の語源ではないかと考えるが、断定するにはいくつかの疑問がある。「ホリカ」＝「逆流」とする

ならば、アイヌの人たちは「ホルカ」と発音していたのではなからうか。なぜならば、その意味は一般的に、「上流でくると方向を変えて、海の方へ向かっていく枝川をいう」からである。

※アイヌの人たちは、川は生きもので、海から上陸して山の方へ登っていくものと、古くから考えていた。従って、山の方へ向かっていく川の流れが、途中で海の方へ向きを変えているとき、それを「ホルカ」（後戻りする）という語で表すのである。（この稿終わり）

### 【今日はこんな日】

町民自慢の近代建築

## 古平町役場庁舎完成 昭和二年

庁舎も次第に手狭になり、建物も老朽化してきたため、庁舎建築が計画されていた。近年、鯉漁も順調であったことから昭和二年五月、一般入札によりよい建設が決まった。水見組（水見元次郎）は、入

札の資格が無かったため、小樽市の山口組に入札を依頼していたが、これに参加していた六業者共に落札出来なかった。その後、山口組との間で三万二百五十円で随意契約が結ばれ、水見元次郎が請負人代理として、六

月六日着工した。工事は、後半雨天のため遅れたが、十一月二十一日竣工、十二月二十八日引渡しが行われた。

総工費は、設計変更もあって、三万四千七百七十円四十銭九厘と増えたが、実際の工費はこれよりも千円余り多くかかり、請負った水見組は大きな欠損をした。翌年、水見組は従業員数人で、新興地・樺太への仕事に出かけた。

この庁舎建築に当たっては、次のような寄付があった。

- 金一千元 山口 金治
- 黒松一本 石井豊太郎
- 同 役場吏員一同
- 赤松一本 高野 常吉
- 赤松一本 議会議員一同
- 赤松一本 高野 常吉
- 赤松一本 浜町一条会

つげ、蝦夷松 原田吉太郎  
水松、蝦夷松 泥ノ木青年団  
生垣用蝦夷松 中央青年団  
当時としては珍しい、鉄筋コンクリート地下一階、地上二階という堂々たる新庁舎は、当時の鯉盛漁による古平の町勢 ※

今は舗装されて立派になったが、昔は、墓場とか焼き場の道路とかいって、狭いでこぼこ道だった。その道をずうつと行くと、右側にグスベリの畑があった、そこにはランプ屋の小屋があった。悪童三人で、少し赤い色のついたそのグスベリを食べると……決して盗む気はない、ちよつとつまむだけ——。するとそれを見つけたランプ屋の

いる。

トマトは、昭和の初め頃にあったかどうかは知らないか、日本人の口にはあまりなじめない味でなかったのかなあ。とにかく私たちは、芋類、南瓜が平均的な間食であり、主食でもあった。グスベリは、当時は店でガラスのコップ一杯何銭かで売っていた。買って食べられる身分ではないから、鯨粕の中に入っ

# 故郷を想う

バアちゃんに、大きな声でカラスでも追っ払うようにどなられる。皆で坂を転がるようにして逃げて帰った。そのバアちゃんの声がおっかなくて、また行く気にはならなかった。後で判ったことだが、ランプ屋さんと隣の北浜先生の家とは近い親戚とか——。どうしてランプ屋というのか、グスベリのこととはもう時効になったが、今でもなんとなく聞きずらく今日に至って

ている数の子や、油焼けをした、ほこりの付いた身欠き鯨を着物でふきふき食べていた。カレイ・ガンジの干したものなど、何も珍しいものではなかった。オンコの実、グミ、コクワ、山ブドウなんでも口にしたい思い出ばっかり……。

禅源寺の裏の池にこっそり行っては、ちよいちよい鯉や鮒を釣った。夏には、池の中にある小さい島まで泳いだりした。見

## 中山産と死亡

漁期に入ると、おめでたい結婚式も嫌われる。

また、身内や自分の漁場に関係する家で赤ん坊でも生まれようものなら、親方は、しぶうい顔をすする。「棹が破れる」にかこつけたもので、お腹の大きい人

## 起縁場鯨

は、家に寄せ付けなかった。出産にくらべて、なぜか死亡はそれほど嫌われなかった。しかし、火葬の煙が海になびくと、凶漁だとして、仮埋葬をしておき、漁期が終わってから改めて本葬儀をし、茶毘(だび)にする。これでは、漁期中に死亡した者は、当分成仏もできない。

つかると、裸のまま逃げてかえった。

先代の和尚さん——みんなおっさんと呼んでいた——は、私の名付け親と聞いていた。後年おっさんが、死んだ兄貴(敏雄)の命日に来られた時に、碁を打ちながらその話をしたところ可々大笑された。ところが、その優しい顔から鬼手一発を打たれ、せつかくの石が死んでしまった。

とんだところで、昔の悪行の引導を渡されてしまった。ああ、ナムシヤカムニブツ！

——つづく——

※(前頁下段より)を誇示すものであった。

工事費もさることながら、珍しいモダンな新庁舎は忽ち大評判となり、見学に訪れる人が跡を絶たなかったという。

庁舎の新築は大正十五年六月の町議会で、鯨漁も順調なことから、建物は鉄筋コンクリート建てとし、その建設が決まっていた。一時、漁業組合との合同建築が論議されたが、数回の協議を重ねても工事費の分担について意見がまとまらず、結局、役場のみの建設ということに決まったのである。

## 婦人会結成の声が上がる

昭和四十年十月七日。冷たい小雨がいちにち中降り続いていて晩でした。町内会有志の方々が四人、私の家に見えられまして。

「沢江町内の親睦と：又、婦人の地位向上のために是非婦人会を結成したい。まとめ役になって協力してほしい。公民館に有志のものが集まっているのですぐ来てほしい」

矢つぎ早やに言われる方達にただ驚くば寝耳に水とは、このようなことを言うのでしうか。計画されていることも、集合していることも一切知りませんでした。

まとめ役といわれても、まとめ役など：とでも出るわけがありません。折角お見えになったのだから、お断りの返事だけでも——と、雨の

## 沢江婦人会

中を出掛けて行きました。公民館は、あかあかと灯りが見えました。重苦しい気持ちのまま、入口の戸を開けました。

「ワーッ」という歓声と共に、つづく拍手の音に、二度三度驚くのみでした。

### 『沢江婦人会』発会式

再三再四の辞退にもかかわらず、沢江婦人会長の座にすわる運命になりました。

会長 大沢 文子  
副会長 糸井はるえ

同 丹後 初江  
幹事長 田口 育子

と即座に決められ、早速、会員募集の回覧、発会式の準備と、目まぐるしい日々が続きました。

### 発会式を迎えて

十一月十八日、発会式と決まり、故伊藤町長さまをはじめ、来賓の皆さま方より励ましのお言葉を戴きました。会の名前は、町長さまから「地名をとった方がいいのでは——」と

いのご意見を戴き、『沢江婦人会』と名付けられました。早速、墨くろぐろと見事な書を戴き、会員一同感激に胸をふくらませました。

「和ということを考えてがんばって下さい。」

## 「ニシンの起源」(上)

明治二十二年、当時、本道の練建場漁業者の多くが加入し、最大の漁業団体であった「北水協会」が、機関誌『北水協会報告』を発行していた。その中から、『ニシンの起源』についての記事を紹介したい。

### ◎所員 野城 応 答

### 『ニシン』の起源 (上)

「鯡と云へる名の語源に付き、農商務省通信員松前郡書記関央氏より質問相成候間、貴会に

初冬のある日、役場の一室で言われた、伊藤町長さまのお声を今でも忘れることができませぬ。

つづく——  
（前会長 大沢 文子  
現在 札幌市に在住）

於て詳細お取調の上直ちに質疑者へご報告有之度此段及ご依頼候也」

会員からこのような質問があり、それに答えているが、文章は書き改めてみた。

### ◆右の質問にお答へする

『本朝食鑑』という本を見ると鯡のことが書いてあり、鯡という字を使っている。

鯡は、加工して身欠きにし、二十四把で堅（たて）一本という。それで商人は、これを二四（ニシ）と取り引きをするので、秋田・津軽・松前では『ニシ』という。『ニシン』というのは、蝦夷地のことばから誤って言われているのである。

つづく——

# むかしの遊び

## こま

『こま』は、生木を取って来て作る。重いから、大きさは直径が三センチから五センチぐらい、高さが六センチから十センチぐらいで、尖端をよく削る。それに、三十センチぐらいの棒に、幅二センチ、長さ五十センチぐらいの木綿布を取り付け、それをこまに巻いて回す。

回転がゆるくなると、この布でこまをシャイで（しゃくること）回す。相手のある時は、長く回っている方が勝ちになる。いくらシャイでも回らないものもあり、あまりシャギ過ぎて、こまを玄関の戸にぶつけたり、窓ガラスを割って叱られることもある。

鉄輪のはまったこまは、小間物屋で売っていた。中に『函館こま』というのがあって、形は

### 湖 銀 間 本

小さいが、鉄輪がふつうのものより相当厚い。その鉄の心棒をヤスリで研いで鋭くし、その回っているのを手の平にのせ、相手の回っているこまの上から落とすのである。そして、相手のこまを転がすと勝ちである。

『函館こま』は、ふつうのこまの二倍ぐらいの値段で、一個十五銭か二十銭ぐらいした。しかし、何しろ重いので威力があり、ふつうのこまにとって手ごわい相手であった。

—— つづく ——

### 強力な助っ人 《ウインチ》 鯨漁場での実験から実用化へ

群来てきた時の鯨場の忙しさは、眠りながらでも働いたといふが、頼りになるのは人力だけしかなかった。

明治二十二年、「一ヶ年の漁夫の給料があれば、機械が購入出来る。漁業の発達と共に、今

「ご寄贈いただき  
ありがとうございます」

■いずめ人形

西村耕二郎さん  
郷里、秋田の郷土人形で、奥さんが結婚の時に持ってこられた品物だそうです。

■古平鯨場風景写真

田岸 カコさん  
昭和初期に、町役場が十枚一組として発行したものです。

■携帯用日の丸小旗

田岸 妙子さん  
戦時中、出征兵士の見送りに使った「人絹」布地の物です。

後には機械の利用を考えなければならぬ。これは、漁業者だけではなく、本道漁業経済の上からも重要な問題である。」

明治二十五年、「青森県の川村氏が『ニシン陸揚機』を新発明し、専売特許を出願した。

明治三十七年、「ニシン陸揚機、またはこれに類した機械を実験したが、その効果については断定し難い。さらに検討を要する。」

大正四年、「水産業界の欠陥は、機械力や科学力の欠けていることにある。鬼鹿村の『花田式鯨沖揚機』は理想に近く、これを設置した所がすでに十数か所ある。函館、岩内では、『ニシン吸上機』を考案した者がいるという。」

昭和八年、「蒸気式起重機も安くなってきた。一万二千九百円余りで設置出来るようになった。この起重機的能力は五トンで、移動式である。」

鯨漁場で、ウインチが何時ごろから使われたのか、いろんな資料から以上のようなことが分かった。

では、古平ではどうだったのだろうか。

次号で見たい。

